

教宣 せぶん

プロ野球改革構想

プロ野球の交流戦が始まっています。見る側にとっては、新鮮で、おもしろい戦いが繰り広げられています。交流戦が始まったのは昨年からですが、交流戦の構想自体は何年も前から叫ばれていました。それが実現に至らなかったのは、セ・リーグ球団の反対でした。巨人戦のテレビ放映料が、巨人を除くセ・リーグ球団の経営に大きな利益を生み出しているという現実があり、交流戦を実施することでドル箱である巨人戦が減ってしまい、巨人を除くセ・リーグ球団が「不利益を被るから」という理由で反対しました。「不利益を被るから反対する」という行動は、個人だけではなく、企業でも公然と行われているのです。

意識を企業内の論理にだけ封じ込めさせられていると、「上」の決定や方針、提案に逆らうことは「いけないこと」「ありえないこと」という思考が条件反射的に働いてしまいますが、ひとたびその意識を解放させると、企業も不利益が被ることが予測されることには既得権を盾に、頑としてクビを縦に振らないことが見えてきます。交流戦が何年も実現しなかったことと言えば、そういった「既得権」を、連盟や推進派・客観派が無視できなかったからです。よほど正当な理由がなければ「既得権」という壁は取り払えないのです。

さて、いま私たちに突きつけられている「通知・提案」に、私たちの「既得権」を覆すだけの正当な理由があるのでしょうか？私たちの生活や人生設計を狂わしてしまっただけの正当な理由があるのでしょうか？会社の主張する「正当な理由」とは、突きつめていくと「もっと儲けたい」という理由です。莫大な利益を稼ぎ出しているにもかかわらず、もっと黒字を出したい、もっと儲けたいために、私たちの「生活」や「雇用」を破壊しようとしているのです。こんな理屈が通るのでしょうか？こんな構図が許されるのでしょうか？

交流戦構想に反対したセ・リーグ球団の反対理由は、利益が減るからでした。私たちが「通知・提案」に反対するのは、「雇用」や「生活」が破壊されるからです。どちらが切実な、切迫した反対理由でしょう。私たちが「通知・提案」に反対するのは至極当然なことなのです。

交流戦構想はその後、オリックス球団の近鉄買収に端を発したプロ野球1リーグ構

想が世に出たことにより、これに反対する労働組合やファンが動き、その結果「世論」は庶民の味方につきました。これによって、一部の勝ち組、一部の大手資本による「プロ野球改革構想」は頓挫し、ファンや選手の視点に立った「プロ野球改革」が論じられ、ファン待望の「交流戦」は実現したのです。

1 リーグ構想を打ち出した一部の勝ち組、一部の大手資本は、莫大な利益を出していたにもかかわらず、さらに利益を上げようと目論んだのです。どこかの企業に似ています。利益を上げられない赤字球団など切り捨てて、地域性やファンの声を無視して、「少数精鋭」に走ろうとしたのです。そのプロ野球におけるリーディングカンパニーたちの「もっと利益を追求する」「自分だけが良ければいい」姿勢が、社会や世論から「ダメ出し」を食らったのです。

いま私たちに降りかかっている現象に良く似ています。成否のキーワードは「世論」です。プロ野球の労働組合がそうしたように、世論に訴え、世論を突き動かすことによって、東海経営の「もっと利益を追求する」「自分だけが良ければいい」という理不尽極まりないこの目論みを、叩き潰しましょう。